

## 2. 被爆者剖検例の保存

### 1. 被爆者解剖例の保存実数

昭和61年11月までに、長崎大学医学部病理学教室（第Ⅰ病理，第Ⅱ病理，原研病理，熱研病理），日赤長崎原爆病院，長崎市民病院および放射線影響研究所の各病理部で解剖された被爆者解剖症例は14,012体であり，剖検診断カード・ファイルとして10,306症例が登録を完了している（表2-1）。氏名検索カードには別に13,046症例分が登録収納されている。臓器は5,129体分が原爆資料センター3階病理保管室に保管されている。この他に対照例として他施設（国立長崎中央病院，国立川棚病院，十善会病院。その他数施設）の症例が461体分保存されている。

パラフィン・ブロックおよびプレパラートは各執刀病理医の所属する施設に保存されており，原爆資料センターにはほとんど収納されていない。なお，これら実数に関しては昭和20年8月9日より後日に生まれた症例も全部含めて収納されている。

表2-1. 被爆者解剖例保管状況

資 料	長崎大学(放影研を含む)	原爆病院	市民病院	合 計
剖 検 総 数	11,241 ( # 3,001 ~ # 14,241 )	1,381 ( 昭45 ~ )	1,390 ( 昭41 ~ )	14,012
剖 検 記 録	8,800 ( # 3,001 ~ # 11,800 )	625 ( 昭45 ~ 51 )	456 ( 昭43 ~ 51 )	9,881
臓 器	5,129 *	—	—	
パラフィン・ブロック	112 ( ~ # 14,203 )	—	—	
プレパラート	—	—	—	
データ・カード記入				
(a)剖検診断カード	9,225 ( # 3,001 ~ # 12,225 )	625 ( 昭45 ~ 51 )	456 ( 昭43 ~ 51 )	10,306
(b)名前検索	10,915 ( ~ 昭59 )	1,169 ( 昭45 ~ 58 )	962 ( 昭43 ~ 57 )	13,046
コンピュータ入力				
(a)臨床診断記入	8,800 ( # 3,001 ~ # 11,800 )	—	—	
(b)剖検粗入力	10,000	—	—	
(c)剖検診断	3,125	—	—	

(昭和61年11月現在)

\* 米国返還資料の644体，および対照例としての他施設剖検例461体分は含まれていない。

## 2. 収録データにおける被爆者例

被爆の有無、及び被爆距離の確認を得るのは非常な困難を伴っており、その情報源の違いによってかなり不確実性を生じる。即ち、患者又は家族の申告による剖検記録（昭和51年迄の分は往復書簡によって確認）に従って分類し、しかも昭和20年8月9日以前に出生した者については、被爆者例は10,372例の解剖数のうち3,942例であった（表2-2）。被爆者手帳を所有する症例は昭和61年11月現在、897例であった（表2-3）。原爆病院と市民病院の症例についてはコンピューター入力が完了していないため、データの連結による被爆者手帳を所有する症例の確認がされていない。

## 3. 保存形態

a) 基本台帳：病理解剖記録の第1ページ（最終病理診断）及び最終ページ（総括、臓器重量等）をコピーし、50症例を1冊として全176冊を原爆資料センター3階図書室に保管している（剖検番号# 3,001～# 11,800まで完了）。

b) データ・カード（剖検診断カード、パンチカード）：表2-1に示す10,306例が年代順、施設別に整理されスチール・ボックスに納められ原爆資料センター1階病理室に保管されている（大学剖検番号# 3,001～# 12,225、原爆病院と長崎市民病院は昭和51年まで完了）。

c) データ・カード（名前検索、図書カード）：全13,046症例分の名前が漢字とひら仮名をつけて「あいうえお」順および施設別に整理され、図書カード・ボックスに納められ、原爆資料センター1階病理室に保管されている。

d) 臓器：ホルマリン固定標本は原爆資料センター保管のうち約3,500例についてはStück瓶に収納され、残りは大型円筒ガラス容器及びタッパーに全臓器が収納され、原爆資料センター3階病理標本保管室に保存されている。ホルマリンは2～3年毎に1回をめぐりに交換されている。

e) ブロック及びプレパラート：原則として執刀教室及び施設で保管されており、表2-1に見る112例については原爆資料センターの病理医による剖検例として1階ブロック・ボックスに保管されている。

f) コンピューター入力の情報：資料調査部と共同作業で成されている。

## 4. 今後の検討事項

1) 資料収集について：今までと同様の項目及び種類のデータ収集と記入が必要と思われるが、将来原爆資料センターがデータ・バンク的な機能を発揮するためには、長崎原爆病院と長崎市民病院の解剖記録のコピーを大学例と同じ形式で冊子にしておく必要が

ある。また、保管場所に制約があるので、今後は光ディスク等のより能率の高い手段によって収納することを検討しなければならない。

2) 被爆状況について：往復書簡による調査と解剖記録に付される臨床病歴に記載された被爆状況（距離）は、被爆者手帳に記載された被爆状況と大きく違うことが時々見受けられる。これは現在両方併記の形を取っているが、データ解析の際に被爆状況を用いて成すことになると、非常に異なった解析結果を出すことにもなりかねない。その正確な被爆状況を決定する方法を含めて今後の検討を要する。

表 2—2. 長崎地区で解剖された症例の被爆の有無

期 間	全剖検数	被 爆 者			非被爆者
		～ 1 km.	～ 2 km.	2 km以上 (含. 早期入市)	
1946～1950	115	3	8	20	84
1951～1955	602	6	25	213	358
1956～1960	1,349	11	65	497	776
1961～1965	2,180	35	218	607	1,320
1966～1970	2,694	30	169	780	1,715
1971～1975	1,759	31	100	534	1,094
1976～1980	1,673	14	68	508	1,083
合 計	10,372	130	653	3,159	6,430
			3,942		

表 2—3. 長崎地区解剖例のうち被爆者手帳所有者

解剖施設	全症例数	被爆者手帳保有者
長崎大学及び放影研		
(# 3,001～# 11,800)	8,800	641
(# 11,801～# 13,000)	1,200	256
(# 13,001～# 14,241)	1,241	*
原爆病院	1,381	*
長崎市民病院 <sup>1)</sup>	1,390	*
合 計	14,012	897

(昭和61年11月現在)

\* 剖検記録のコンピューター入力 that 未完了のため、未確認である。

1) 昭和41～44年の長崎大学との重複16例を減じてある。